

追悼

神野教授飛驒に殉ず

1月18日、小雪のちらつく寒い朝方、神野さんが天文台の研究棟と管理棟を結ぶ渡り廊下で倒れているのが発見された。すでに脈はなく、医師の診断によると17日から18日にかけての深夜、脳出血のため瞬時にしてあの世に旅立たれたという。ひるから御遺体は村のお寺に安置され、その日の夕刻、奥様や御家族の方々とともに豊中の御自宅に悲しみの帰宅をされた。天文台員一同茫然自失、数日間は全く仕事手がつかなかったという。今は只御冥福を深くお祈りする以外にない。

私は1月16日のひるすぎ、“飛驒4号”で高山を発ち京都に向った。この列車の発車3～4分前に大阪発の急行“高山号”が高山駅に入ってくる。丁度“高山号”を降りた神野さんは“飛驒4号”の座席にいる私をみつけ、ニコニコと何度も手をふって高山駅出口に消えてゆかれた。神野さんは1月18日、19日、野辺山の宇宙電波望遠鏡と飛驒天文台ドームレス太陽望遠鏡との共同観測のため、天文台にこられたのであった。野辺山の電波観測によれば、マイクロ波でみた太陽の極地方に、はっきりとした増光が存在する。神野さんはこの現象に大きな関心を示し、その原因究明に当っておられたのである。17日午前中には太陽観測の手順や役割分担について黒河さんと打合せを終え、午後からは研究室で研究に専念されていた。従って誰もが突然の旅立ちを予想できなかったのも無理はない。

神野さんは京都大学・理学部・宇宙物理学科を卒業されてから、一旦は岡山大学の助手になられたことがある。しかしどうしても宇宙物理学の研究を続行したいという強い希望をもっておられたので、岡山大学を退職し、京都大学の新制大学院に再入学、宮本先生の指導のもとに研究者としての道を歩みだされた。当時の専攻分野はオルフ・ライエ星とかBe-星とかの特異星の大気構造であった。其後上野先生の御世話であったと思うが、現在オランダ・ユトレヒト天文台にいる難波さんと共に、ユトレヒト天文台においてド・ヤーヘル教授のもとで太陽物理学の研究を始められた。当時のユトレヒト天文台にはミンネルト先生が健在で、神野さんは随分と面倒をみてもらったらしい。神野さんの研究室にはミンネルト先生の写真が飾られていたのを憶いだす。

神野さんはメキシコとモリタニアでの皆既日食観測に参加された。問題はコロナ大気が不均質な彩層内のどこまで喰い込んでいるかであった。神野さんの撮影されたコロナの赤線とか緑色が皆既直後の彩層スペクトルと共存している写真は非常に有名であり、一般天文学の教科書にも屢々採用されている。神野さんの解析によると、コロナは光球上層1000～2000kmですでに存在し



ているという。

神野さんといえば、ライマン連続ウィークニングを語らないですますことはできない。極端紫外線領域で高階電離イオンの輝線がスペクトルを支配している。912 Åを境として短波長側では輝線強度が彩層-コロナ転移層モデルから計算できる推定値より2～4倍弱く、また912 Åよりも長波長側では推定値と一致する。この現象を世界に先がけて発見したのは神野さんであったと思うのだが、原因はコロナ-彩層転移層、またはコロナ底部に存在する中性水素原子によるライマン連続吸収であろう。数年前、神野さんはハーヴァード大学に滞在、太陽面の二次元的な極端紫外線スペクトルのデータを持ち帰り、高山短大の西川さんがその解析を行なった。その結果によるとライマン連続ウィークニングの時間的、空間的な変動は極めて大きい。神野さんはこの中性水素原子がどこから来るものか、常に考えておられたようであったが、もうそのお答えをきくこともできなくなってしまった。

飛驒天文台は昭和43年に開所式が行なわれた。標高1300mの高地の気象はまことにきびしいものがある。開設初期には道路が決壊したり、暖房がうまく作動しなかったり、苦勞が絶えなかったという。神野さんは控え目な方で表に立つことは極力さけてこられたが、すでに故人となられた服部先生と共に現在の天文台の基礎をきづいてこられた。昭和54年ドームレス太陽望遠鏡の晴れの開所式、車椅子の服部台長の傍で式次第を取りしきられたのは神野さんであった。現在ドームレス太陽望遠鏡は順調に稼働し、若手研究者、ベテラン研究者の来訪が絶えず、天文台の実りの時期をむかえることができたのは、服部さんや神野さんといった先人の努力のおかげであると、つくづく思うのである。(川口市郎)